

ヤマサシ の暮らし

神保賢一路



神保 賢一路 (じんぼ けんいちろ)

1952年神奈川県生まれ。横浜市立野毛山動物園に勤務し、カンムリシロムクの飼育繁殖法を確立。現在は横浜市緑政局舞岡公園に勤務。里山の野生動植物との共存を目指す環境の維持管理と公園ボランティアの指導に努めるかたわら、ヤマセミの調査と保護活動に取り組む。主な著書に『ヤマセミの四季』（神奈川新聞社）、『森へ入ろう』（神奈川新聞社）、『野生動物救護ハンドブック』（共著、文永堂出版）などがある。

ヤマセミの暮らし

1997年12月1日 初版第1刷発行

著 者 神保賢一路 © Ken' ichiro Jimbo 1997

発行者 奥村 武

発行所 株式会社 文一総合出版

〒162-0812 東京都新宿区西五軒町13-10

電話 03-3235-7341 ファクシミリ 03-3269-1402

郵便振替 00120-5-42149

印刷・製本 奥村印刷

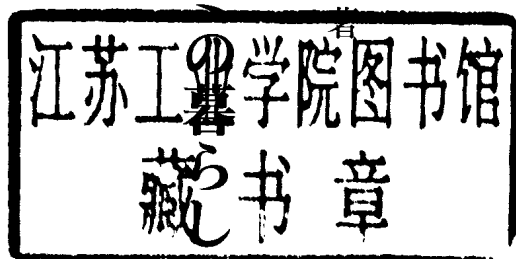
定価はカバーに表示してあります。

乱丁、落丁はお取り替えいたします。

ISBN 4-8299-2121-8 Printed in Japan

神保賢一路

ヤマセミ



文一総合出版



はじめに

思い起こせば、ヤマセミとの初めての出会いは中学二年の夏休みでした。

そのとき私は、南アルプス北岳へ登るため、標高千五百メートル付近を流れる野呂川にかかっていた吊り橋を渡っている最中でした。吊り橋は約五十メートルの川幅の上に架かった人一人がやると通れる幅の狭いもので、背にしたリュックの重さを気にしながら、バランスを崩さないように一歩一歩足元を確かめながら進んでいました。溪流の中央に突き出た岩に激しくぶつかった水は二つに裂かれ、再び何事もなかったかのように合流して、耳鳴りのようなものすごい音を立てて流れ下っていきます。空には、水の流れと競争するかのようにちぎれた灰色の雲が次から次へと吹き飛んで消えていきました。

川と雲の間を吹き抜けていった風が、私に大声を上げて通り過ぎて行ったときです。得体の知れない白っぽい塊が、金属的な声を張り上げながら溪流の水しぶきの中を滑るように近づき、岩の上にびたりと止まったのです。足が短く、どっしりとした体。全身白と黒の斑模様の生物の頭にはインディアンの酋長のような冠が逆立ち、辺りの空気を一変するかのような威厳を放っていました。まわりの音全てをかき消し、私に聞こえてきたのはこの生物が時々発した風を切り裂くようなキョ、

キヨ、という声だけでした。

吊り橋の上で身じろぎもできず見つめていると、突然その生物は体を一瞬空中に踊らせ、まるで鯨捕りのモリのように水に飛び込みました。水中から飛び出すと、嘴には必死で暴れている魚がくわえられていました。そして私に見られていることに気づくと鋭い一瞥^{べつ}を投げ、ジェット機のように飛び去ってしまいました。

今から思えばほんの短い間のことでしたが、私にとっては時間の止まった永遠の出来事になってしまったのでした。山小屋に到着し、夕食を済ませて寝袋に入ると、あの時、風の中から突然現れて飛び去って行った生物の姿が生々しく迫ってきて、なかなか寝付けませんでした。

私が、その生物がヤマセミという鳥だと知ったのはそれからしばらくたってのことでした。もう一度会ってみたい。いつしか私の山登りはヤマセミを求め、語り合うものとなっていったのです。それとともにヤマセミは、私に自然との付き合い方を強烈に教えてくれたのでした。

神奈川県厚木市内の開発が進む地域に一つがいのヤマセミが生息していることを知ったのは、一九七九年のことでした。以来十七年にわたって観察を続けてきました。ヤマセミの観察では年月だけが過ぎ、その割にはわからないことばかりです。この十七年間、ヤマセミが暮らす地域でも大きな開発が繰り返行われてきました。そのつどヤマセミだけでなく、多くの野生動物たちが犠牲になってきました。調査地の状況は年を追うごとに悪化しています。このままでは何のためにヤマセ

ミの生活を記録してきたのだろうか、気持ちばかり焦るのです。一人でも多くの方にヤマセミの生活を知っていただきたい、そして少しでも早く彼らの暮らしを守ってやりたいという願いを込めてこの本を書くに至りました。ヤマセミの生態書としてはまだまだ不十分ではありますが、これまでの中間報告として見ていただけたら幸いです。

なお、同一の生物でも生息環境や食物によって異なった動作や行動が見られる場合があります。私のヤマセミの調査は神奈川県厚木市で行っているものです。ですから、この本に記したヤマセミの行動は、特に明記しない限り、全て厚木市内（本文では調査地と呼ぶ）で観察したものです。また、私はこれまで三羽のヤマセミを人工飼育し、二羽を野生に戻しました。これらのヤマセミの飼育は全て神奈川県より依頼を受けて行ったものだといいことを、先にお断りしておきます。

目次

はじめに..... 3

第一章 ヤマセミってどんな鳥..... 11

カワセミの仲間..... 12

日本のカワセミ類..... 16

雄雌の見分け方..... 19

足..... 21

羽..... 23

ヤマセミの異名..... 28

神奈川県内に生息するヤマセミの個体数..... 30

第二章 ヤマセミの生活..... 35

魚を捕らえる..... 36

待ち伏せ..... 36

ダイビング..... 39

獲物をたたきつけて呑み込む..... 40



ヤマセミの採る魚	42
活動時間	46
ペレットを吐き出す	48
休息	51
あくび	53
羽づくろい	55
水浴び	56
ヤマセミの天敵	58
アオダイショウ	59
ノスリ	61
ハシボソガラスとハシブトガラス	62
チョウゲンボウ	67
モズ	69
第三章 ヤマセミの繁殖行動	73
ヤマセミが営巣する崖	74
巣の形態	78
造巢中に出る土の排除	84
交尾と求愛給餌	87



産卵と抱卵.....93

育雛.....96

造巢中の雄の死.....108

新たな雄の出現.....111

観察用ブラインドの設置.....114

第四章 ヤマセミの保護飼育.....127

保護されるヤマセミ.....128

自宅での飼育.....132

ヤマセミを守ったボチ.....134

人工飼育その一.....142

外部測定.....145

強制給餌の方法.....147

強制給餌のための保定.....150

強制給餌から自力採食へ.....153

食物の確保.....157

水浴びによるリハビリ.....161

突然の死.....163

二羽目を保護.....165

人工飼育その二	167
放野	173
おわりに	176
参考文献及び引用文献	182



イラスト／山口れいこ

第一章 ヤマセミつてどんな鳥

カワセミの仲間

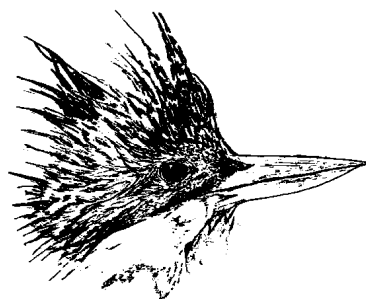
日本には三種のカワセミ類が繁殖しています。宝石のような深く鮮やかな金属光沢のある羽色の持ち主、カワセミはまさに水の妖精のようです。それに引き換え、薄暗い深い森にすむ全身赤色の羽の持ち主、アカシヨウビンは森の妖精といってもおおげさではないでしょう。そして白と黒の羽に身を包み、水面上の横枝から水中の魚を待ち伏せるヤマセミは、獲物をねらうヒヨウのような力強ささえ感じさせます。三種とも敏捷性に優れており、彼らとの出会いは森の中を駆け抜けるシカに遭遇したときのように、一瞬の出来事に終わることも少なくありません。しかし、彼らに出会ったときの強烈な感動は一瞬の出会いで十分です。その姿は心に深く刻まれ、初めて異性を好きになったときのように決して忘れないものとなるはずです。

この愛すべきカワセミ類。彼らはなぜこれほどまでに私たちの心を引き付けるのでしょうか。羽の美しさももちろんのことでしょう。頭でっかちで足が短く、どことなく愛嬌があり、親しみやすい中にも荒々しく爆発的なバイタリティを感じさせるからかもしれません。しかし、そんな中にも一輪の花を取り巻く空気さえ傷つけない繊細さを持ち合わせているところがますます魅力的に思えます。

カワセミ、ヤマセミの主食は淡水魚類ですが、春、東南アジアから渡ってきて繁殖するアカシヨウビンは、魚類のほかにカエル、トカゲ、ザリガニといった小型の両生爬虫類や甲殻類なども主食



ヤマセミ



ヤマセミ



カワセミ



アカシヨウビン

としています。カワセミ、ヤマセミが魚類中心の食生活を行っているのに対して、アカシヨウビンの食物レパートリーはかなり広いことがわかります。このことから、カワセミの仲間といえども必ずしも魚類中心の食生活を送るものばかりではなさそうです。日本以外に生息するカワセミの仲間はどのような食性をしているのか、見てみるのも面白そうです。話をわかりやすくするために、この本の初めてカワセミの仲間の鳥について少し紹介しておくことにしましょう。

カワセミの仲間はブッポウソウ目カワセミ科に属し、三亜科十四属九十二種（中村、一九九一）からなるグループです。日本で繁殖しているカワセミ科の鳥は、すでに紹介したカワセミ、ヤマセミ、アカシヨウビンです。これらの三種はうまいことにそれぞれが三亜科に属している鳥たちです。つまり、カワセミはカワセミ亜科、ヤマセミはヤマセミ亜科、アカシヨウビンはワライカワセミ亜科に属しています。この仲間は

亜種まで加えれば約三百五十種 (FRYほか、一九九二) が知られています。それでは、カワセミ科の仲間でもそれぞれ属する亜科ごとに食性にも違いがあるのでしょうか。

ワライカワセミ亜科の鳥は、嘴が太く下嘴がやや上方にそり上がった形をしているのが一つの特徴です。オーストラリア、ニューギニアに生息しているワライカワセミ、アオバネワライカワセミなどは、この嘴の形状を生かしてカエル、ネズミ、ヘビ、トカゲなどをすくい取るようにして捕らえています。食性からもわかるように、彼らの生活している場所は水辺というよりもむしろ森や草原など開けた所なのも特徴でしょう。

一方、カワセミ亜科の中でも魚や水生昆虫を捕らえて生活している種は、側面が平らで細くて長い嘴をしています。森林などに暮らし地表や水面付近で食物を得ている種は、ワライカワセミ亜科の鳥のような形状の嘴をもっています。たとえば、東南アジアに生息するミツユビカワセミやアフリカに暮らすコビトカワセミは幅の薄い平たい嘴をもっています。これは彼らの主食がクモや昆虫で、それらをフライキャッチにより捕らえている (FRYほか、一九九二) からでしょう。

ヤマセミ亜科の鳥は、他の二亜科のように目も覚めるような金属光沢の羽色を全身にもたないのが特徴といえるかもしれません。この仲間は日本に見られるヤマセミのように斑をもつものが多く斑模様のカワセミ (Pied Kingfisher) といわれています (中村、一九九二)。この仲間はいずれも左右の側面が平たく、カワセミ以上に鋭く太いナイフのような嘴の持ち主です。これはヤマセミ亜科の鳥が水辺に暮らし、魚類中心の食生活をしているからでしょう。そのほか、ニューギニアに暮ら